

表記の「ゆれ」と「多様性」

- - 筆記実験による分析 1 - -

神戸山手女子短期大学 井上道雄

【はじめに】

主観的表記頻度調査(賀集,1994)は、日常語が漢字かなで多様に表記されており、「表記のゆれ」が、筆記活動での一般的な現象であることを示した。それは、表記の対立に基づく国語学でいう「ゆれ」というよりも、複数の表記形態からの表記時のかなり自由度の高い選択、といえるのではないだろうか。

ただし、国語学でいう「ゆれ」は、さまざまな類型を含んでいる。ここでは、われわれの調査で取り扱った、語のレベルでの文字体系間のゆれに限定して論を進める。表記の「ゆれ」全体からいっても、この文字体系間によるゆれが、新聞みだし語調査でも約80%を占めている(国研,1983)。

従って、筆記活動からみれば、「ゆれ」といった消極的なニュアンスを含むことばではなく、むしろ表記の「多様性」として、どの表記形態を言語表現

として選択するのか、といった積極的な筆記活動の一面として捉えられるだろう。

【表記の多様性 - - 主観的表記

頻度と「語表記のゆれ」】

表記のゆれの研究は、すでに国語研究所(1983)の『現代表記のゆれ』があり、新聞の語表記のゆれが調査されている(付-1 新聞における語表記のゆれ一覧)。そこでまず、われわれの行った主観的表記頻度調査語750語の表記類型が、語の表記のゆれを反映しているかを検討するため、客観的な表記資料である新聞の語表記のゆれと比較した。

主観的表記頻度750語のうち、約半数の377語(50.3%)に、新聞の語表記のゆれとの一致が見られた。Table1は、それを表記類別に示したものである。

表記類型の語数が異なるため、各表記類型ごとにゆれ語数の比率をみとめる。表記形態の多様性が、

Table 1

主観的表記頻度750語(賀集1994)における新聞の語表記のゆれ(国研,1983)

表記類型	ゆれ語数(%)	類(%)	ゆれなし語数(%)	類(%)	類型別のゆれ(%)
単一類					
漢字	77(10.3)		135(18.0)		
ひらがな	26(3.5)		25(3.3)		
カタカナ	6(0.8)	109(14.5)	20(2.7)	180(24.0)	37.7
優位類					
漢字優位	77(10.3)		55(7.3)		
ひらがな優位	23(3.1)		13(1.7)		
カタカナ優位	13(1.7)	113(15.1)	21(2.8)	89(11.9)	55.9
二表記類					
漢字ひらがな	46(6.1)		9(1.2)		
漢字カタカナ	1(0.1)		3(0.4)		
ひらがなカタカナ	17(2.3)	64(8.5)	16(2.1)	28(3.7)	69.6
並立類	76(10.1)	76(10.1)	23(3.1)	23(3.1)	76.8
分類不可類	15(2.0)	15(2.0)	53(7.1)	53(7.1)	22.1
	377(50.3)		373(49.7)		

単一から優位、二表記、並立類へとまずにつれて、表記のゆれ語数の比率が増加している。

この結果、主観的表記頻度と表記類型は、今日もっとも主要な活字媒体のひとつである、新聞の語表記のゆれを反映していると言えるだろう。これは、文字体系間のゆれ（語表記のゆれ）が、一般的で日常的な現象であり、表記の多様性、つまり表記形態の選択にかなり自由度のあることを示している。そして、この表記の多様性は、筆記活動時の積極的な側面として捉えられるのではないだろうか。

【筆記実験 - 高出現頻度語の手紙文の筆記】

筆記実験は、表記型による表記の選択性を調べることを目的とした。主観的表記頻度表から、二表記類(3表記のうち2つが70%以上で他が50%未満のもの)は、単一類(3表記のうち1つが70%以上で他が50%未満のもの)に比べて表記のゆれ(多様性)が生じやすいと予測される。

<方法>

(1)筆記材料：調査対象語は、出現頻度(国研,1962)が、0.100 以上の高出現頻度の語(130語)より選んだ。表記型は、単一類の漢字型(該当語数46語)と二表記類の漢字ひらがな型(該当語数20語)を用いた。二つの手紙文のそれぞれが、これらの表記型から各8語計16語より構成された。

手紙1：年長の人宛「成人式のお祝いへのお礼の手紙」(センジツハ セイジンシキノ オイワイト オデンワデノ ココロノ コモッタ オイワイノ コトバヲ アリガトウ ゴザイマシタ。 アニヤ アネノ トキ ワタシハ……)

手紙2：友人宛「旅先からの絵はがき」(オゲンキ デスカ。 ナツノ ヤスミモ モウ ハンプンガ スギテ シマイマシタ。 ワタシハ イマ

ダイガクノ トモダチト……)

(___ 漢字型 ___ 漢字ひらがな型)

(2)被験者：女子短大生58名。

(3)筆記は、2回おこなった。第1筆記時に、教示(練習問題を含む)と、2つの手紙文よりなる小冊子を被験者に配布。各手紙文の下半分は、筆記用に罫線がひかれている。被験者の課題は、二つのカタカナで書かれた手紙文をふだん書いている「漢字かな混じりの文章」に書きかえることであった。各手紙文は、筆記前に、実験者が手紙の宛先と内容を説明し、文章全体を1度読み上げた。筆記は、被験者ペースで行った。筆記時間は、1文章約10分であった。第2筆記は、1時間の休憩をおいた後、再び同じ二つの手紙文を筆記させた。最後に、調査対象語の漢字検査を行った。

<結果および考察>

Table2は、手紙文1・2の各表記型における筆記の結果である。いずれの表記型においても、漢字表記が一貫してなされていた。調査対象語が、高出現頻度語である点、視覚呈示で筆記時間が十分にあった点、さらにかかる実験状況が、被験者に漢字の書き取りを想定させた点等から、漢字表記への方向づけが生じたものとも考えられる。従って、手紙の内容および全体の表記型によるゆれ(多様性)は、ほとんどみられなかった。

ただし、第1と第2筆記間の表記のゆれ(個人内のゆれ)は、漢字ひらがな型(10)が漢字型(1)に比べて明らかに多かった。このことは、漢字型は、安定して漢字表記されるが、多様な表記形態をもつ漢字ひらがな型は、漢字を熟知していても、筆記時に表記のゆれ(多様性)が生じていることを示唆している。また、いわゆる交ぜ書き表記は、漢字ひらがな型でのみ(7)みられた。これも表記の多様性の一端を示すものと解釈できるだろう。

Table 2
筆記実験の結果

手紙1	手紙2	
	漢字型	漢字ひらがな型
漢字表記	460	455
ひらがな表記	0	1 コトバ
表記のゆれ	1 アネ	4 ココロ1, トモダチ2, イマ1
交ぜ書き	0	4 コトモ2, トモダチ2
他の表記	0	0
筆記もれ	0	2 イマ2
漢字検査		
誤り	1 脳(ムネ)	0
空白	2 ムネ	0
	漢字型	漢字ひらがな型
	460	454
	0	1 デンワ
	0	6 トモダチ2, デンワ4
	0	3 トモダチ
	0	4 TEL(デンワ)3, 電
	3	1 ヒカリ
	1 河	0
	0	0